

史料館だより
第 16 号
1991・10・10

編集・望月 浩
発行・神戸深江

新生活文化史料館

〒658 神戸市東灘区深江本町3-5-17
電話(078) 45314980

十年の歩みと展望

設立と運営の理念

街角の小さな博物館が開設されて満十年が過ぎた。小さな灯を絶やさずここまで来れたことは私たちにあって、大きな慶びである。その間、多くの方のお力添えによって助けられ、育てられてきた。改めて厚く御礼申上げたい。

史料館は、一九八一年二月に史料室として開設された。戦前から試みながら挫折してきた「本庄村史」の編纂を、深江財産区管理会が再び呼び掛け、深山家をはじめとする多くの方から資料提供があったこと、田辺真人・初代館長の着想が豊かだったこと、周囲に多くの協力者がいたことが、直接の契機だった。しかし、巨視的には、当時広く喧伝された「地方の時代」と深いかわりがある。それは地域社会の独自性と個性を尊重することだった。しかも当時、政治・経済・社会の立場から論じられることが多かったのに対し、史料館は文化の立場から「地方の時代」を実験する場であった。「アンチ中央」や「お国自慢」という狭い発想ではなく、自らのよって立つ

史料館館長代行 大 国 正 美

基盤を明らかにすることによって、地域を語ろうとする発想であり、「地方の時代」より「地域主義」という方がふさわしい。その意味では史料館は七〇年代後半からの社会風潮をむしろ先導する形で歩んできた。それだけに、この小さな灯を生み育てた地域社会の精神的な豊かさに、感謝と誇りを感じる。

十年の回顧

こうして設立運営された史料館の十年を時期区分すれば三つに分けられるだろう。

第一期は、史料室時代である。田辺前館長を中心として全く手探りの時代であった。活動の拠点も史料室では余りに狭く、市民の中にもうってでるゲリラ戦法の色彩が強かった。そのおかげで、史料館は地域社会と一体になり、多くの支える人を得た。この選択は、最良のものだった。

第二期は八三年十一月の拡張以降、田辺前館長がニュージールランドに赴任した八六年三月までである。「本庄村史」資料編纂の本格化、広くなった史料館を拠点にした様々な文化活動の展開など、それ

までと全く異なる活動が可能になった。

第三期は、田辺前館長の離任以降、現在までである。「本庄村史」本編の準備が始まる一方、合議制による運営、館員の得意分野の分担制、特別展の活性化、研究機関としての水準の向上を目標にした。まさに田辺氏個人の発想によりかかっていた時代から、「個性の輝く時代」へ、運営の質的な転換が計られた。成否の判断は市民に委ねるが、個性尊重の方向は、史料館の理念に適用している。

成果と課題

史料館運動十年の中で、最も大きな成果は、地域社会と手を携え、文化活動を定着できた事だろう。深江の浜から有馬へ魚を運んだ歴史の道を体験する「魚屋道を歩く会」が地域の人達の支えで、毎年開催できることは、その象徴である。その結果、史料館は文化活動の核として社会的に認知された。

また館員が外部の機関から、講師として、原稿執筆者として依頼されることがすつかり定着したのは、個性尊重の方針の一つの成果であろう。そしてさまざまな地域に埋もれた資料の発掘と記録保存にも貢献できた。ある文書群の場合は、土間に直置きしていたために、湿気による破壊が広がる直前だったし、地域のネットワークを生かしたきめ細かな資料探しは、史料館の特性をフルに生かすものだった。とは言うものの今後の課題は多い。当面は、これまでの路線を継続発展させながら、地域文化の核としての役割を果たすために、近隣の博物館相当施設や大学との連携を一層進め、館員同士でチームを組み、テーマを決めた総合研究を推進したいと思う。新たな歩みに一層のご支援をお願いする次第である。

深江の漁業について

史料館研究員

下久保 恵子
望月 友二

一、はじめに

本庄村史の民俗調査も昨年末から、一カ月に二〜三回程の定期的な聞き書きが行なわれ、昔の人々の暮らしが色濃く浮き彫りにされてきた。

そして今秋には、最近調査進度の著しい、深江の漁業について特別展を行なう運びとなった。

本稿では、特別展にあわせて、これまでの漁業の聞き書きの中から、漁法の概略について報告してみたい。

二、深江の漁業概観

簡略ではあるが、深江の漁業史を概観する。

深江は、江戸時代よりの漁業村で、『兵庫県漁業慣行録』によれば、明治二十年頃で漁船数六〇、漁民九十二人と漁業が盛んなところだったことがわかる。主な漁獲物は、イワシ、エビなどで、漁法としては地曳網漁・打瀬網漁・手繰り網漁などがあつた。地曳網漁場は、『兵庫県漁業慣行録』によると東芦屋村境字傍示川尻より西青木村境字三本松筋までであつたが、明治十年頃より、芦屋村との入会漁業（芦屋村も深江村もその区域で魚をとつてもよい）になつた。

明治・大正・昭和初期と深江の漁業は栄えたが、昭和四十七年十月に東神戸一帯の浜の埋め立てにより、深江を含む神戸市東部漁協は解散し、幕を閉じた。

三、漁法の種類

深江の漁師は携わつていた漁法によっていくつかのグループに分かれていた。人を雇つて大規模なイワシ地曳網漁を行なう網屋や、打瀬網漁を中心とする中規模の漁師、セウタセ・てんぐり網漁など浜の近くの小規模網漁やハエナワ漁をする小漁師（多数）である。小漁師が網屋に雇われて地曳網漁に従事するなど、当然グループ間の交流はあつたが、日常のつきあいは各グループ内部で行なわれることが多かつたようである。

以下、主な漁法について説明する。

①地曳網漁（四月〜十一月） 図1参照

約四〇人がかりで行なわれる大規模な漁。網元（網屋）は村外からの出稼ぎの人たちも多く雇つた。戦前、深江の網屋は七〜八軒で、ほとんどが一トウ（地曳網に必要なアミ・船の一セット・二隻の船と一體の手こぎ船）ずつのアミ・船を所有していた。戦後まもなく人力でアミを曳くかわりに船曳網漁に変わった。

地曳網で獲る魚はカタクチイワシが主で、加工してダシジャコ・チリメンジャコとして出荷した。マイワシは鮮魚として市場へ出した。操業期間は、四月〜十一月までだか、網を入れても採算がとれなくなつた時点で、その年の漁は終わりとしており、一年の内、地曳網漁をしている期間は半年ほどだった。

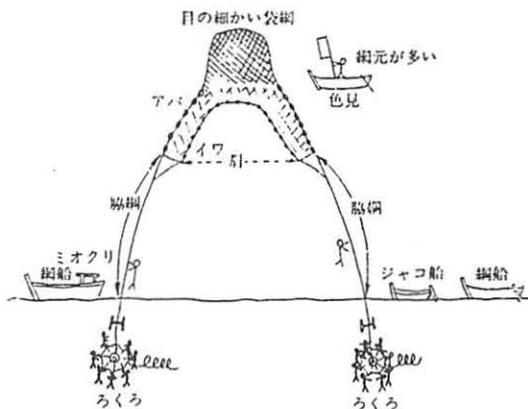


図1 地曳網漁「近畿の生業」より

二隻の船にそれぞれろくろを積み、二〇人程度ずつが乗つて、沖まで行き、オキマワシ（漁撈長）が指示して、魚の群れにアミを入れる。次に二隻の船は浜まで帰り、浜にろくろを木製のいかりで固定し、曳き網の端をろくろにとめる。網の部分はろくろで浜から曳き、アミの部分は手でたぐつた。ろくろをまわす人が八人、アミをたぐる人が八人、その他四人の役割分担で仕事した。アミをあげる場所は青木（芦屋の浜。あがつた魚は手こぎ船で深江の港まで持ち帰り、加工屋に売つた）。

水揚げは十万円あつたら、燃料代と米代で二万円、親方が四万円、残り四万円をオキマワシ、カジモチを筆頭に分配した。オキマワシはだいたい三人前の分け前をもらったという。オキマワシは出漁場所を決め、鳥の飛来、魚のハネで魚群をみつける重要な

役であったが、戦後は魚群探知機にかわった。戦前阪神間では、御影・魚崎・深江・芦屋・西宮・鳴尾・尼崎に網元があったが、深江がいちばんよく獲ったという。とくに船曳きになってからは、灘で一番で、深江の船が出ていくと、他所の漁師がついてきたほどだった。アミについての情報交換はしなかった。アミのフクロの作り方とおもりのつけ方がポイントで、沖で底が深ければ網が浮かないように下におもりをつけるなど、現場で工夫した。

地曳網漁のオフ・シーズンの冬には雇われの乗り子は郷里へ帰ったり、工事の仕事やパチンコでいいだ。地元の小漁師はハエナワやあさり採りをして生計をたてた。

② 打瀬網漁（一月～八月中旬、九月～十二月）

打瀬船と呼ばれる三本マストの帆かけ船（全長六尋約十四・四m）で風を受け、アミを曳く漁法。中程度の漁師が主に自家労働力で操業した。カレイ・タコなど海底にいる魚や、エビ、貝を獲る漁法だが、季節や漁場の状態で狙う獲物を替え、それによって、アミの種類やかけ方もいろいろに変化させた。風や時期によってどのアミを選ぶかは漁師の技術や経験の見せどころだったという。戦後はエンジン船が普及し、漁場までエンジンで行き、漁は風のみで行なった。

〈基本的な漁法〉

- ① 目的地までは前の二本の帆をあげ、風を間切りながら進んでいく。
- ② 適当な地点まで来たらアミをおろし、アミにつないだ綱の端を打瀬船の帆柱などに結びつける（どこのに結びつけるかは使うアミの種類によ

って異なる）。

- ③ 帆を三本ともはり、船の横側からの風をまっすぐ受けるように帆の向きを整える。その時、横風を受けた船は不安定になるので、浮き上がってしまふ。そして手前側の舟べりからおもりを入れ、バランスをとる。
- ④ 風が出ると帆に風をあて、四十分ぐらい走ってから帆を降ろし、アミを引き上げる。
- ⑤ ①～④を繰り返す。

⑤ ①～④を繰り返す。

（イッチョウ網）五月～八月盆頃（図2参照）
カレイ・タコなどの底ものを獲る。とくに七月中旬～八月初めはシラサエビ・カレイ・アナゴなどが産卵期で砂地にあがってくるのを狙った。網目の大きさはシラサエビ用とタコ・カレイ用の二種あった。

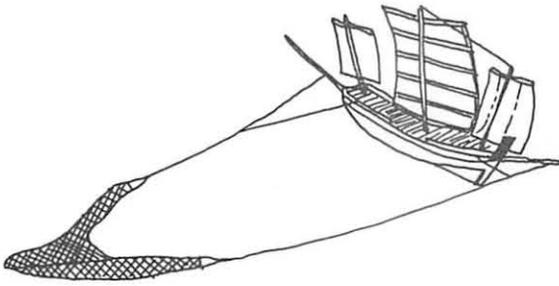


図2 打瀬網漁（イッチョウ網）

船のトモとヘサキについたヤリダシ棒にアミの先につないだ綱の両端をそれぞれつないだ。従って、使用するアミはひとつである。

アミはフクロ・ワキで構成され、垂直に保たせるためにワキアミの手前にテギと呼ばれる三角形の板を取り付ける。それに直径一寸二分の大綱をつけ、その前にマエイシと呼ばれるおもり石をつける。太綱は海底のどろを攪拌して魚の目をくらませる役目をする。マエイシは風の強い時、アミが浮かないように数を増やすなど微妙な調整が必要だった。

（ジョウゴ網）九月～十月中旬（図3参照）
「うわもん」と呼ばれるエビ・エビジャコ・ワタ

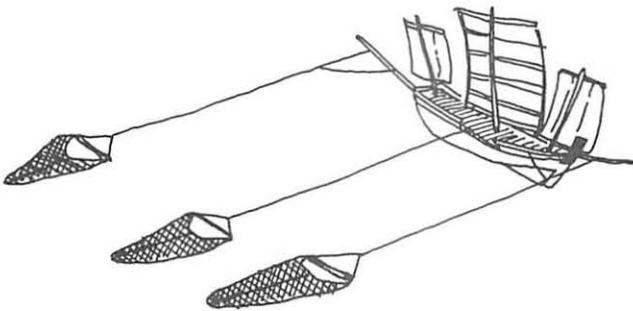


図3 打瀬網漁（ジョウゴ網）

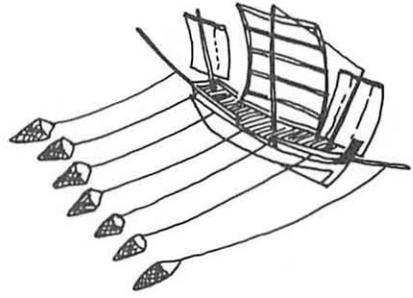


図4 打瀬網漁(ケタ網)

リガニ・スズキを獲った。
 打瀬船の各マストにひとつずつ、合計3つのアミをつけて、一度に曳いた。各マストには綱1本を結びつけ、マエイシのところを綱を両側に分けた。さらに、開口部にハリダケをいれ、おもりのウデイシを両側につけて、安定させた。
 〈テツボウ網〉五月初め〜二十日過ぎ
 ハリイカ・メイタガレイ・タコ・アブラメ・コチを狙う。形はイッチョウアミと同じだが大きさが小さい。ただし獲物が大きいのでアミの目の大きさはジョウゴアミより大きい。
 〈ケタ〉八月を除いて年中(図4参照)
 夏の漁は、トリガイ・シラサエビ・カレイ、冬の漁はツメガイ(サルボウ)・アカガイを獲った。ケタはひとつの打瀬網に最高で8つつけ、船の端につけたものほどアミの入口のおもり石を重くして安定を

はかった。ケタはアミの入口に鉄のツメをつけ、そのツメで海底の獲物をひっかけてアミの中に入れる。ツメの間が獲ろうとする貝などより広すぎるとひっかからず、狭すぎるとドロをつまらせてしまうので、獲物によって、何種類もの中の道具があった。ツメの間はだいたいアカガイ一寸三分、ツメガイ(サルボウ)九分、トリガイ一寸三分と決まっていたが、貝の育ちがよい時は大きめのものを使うなど道具選びにも神経を使った。ケタは西淀川の福(大阪市)というところで購入した。

ケタはアミの数が多く、水揚げは増えるがアミを揚げるための労働もきつく、腕のある人にしかできなかった。また、風がないとケタの数がたくさんひけないので、アミの方が効率がよくなるため、アミにかえるなど魚の種類によっても使い分けをした。
 ③小規模な漁法
 〈セウタセ〉五月〜七月

ツブイカ・カレイ・キス・テンコチを獲る。形・方法は打瀬網と同じだが、浅瀬で行なうため船、アミとも規模が小さい。船の大きさは五尋〜六尋(約9m×10.8m)。セウタセ網をする船は朝夕に立つ市の合間に帰ってきて、新鮮な魚を近所に売り歩いて、現金収入を得る。五月〜七月以外は地曳網の手伝いをして生計をたてている人もあった。

〈テングリ網〉(図5参照)
 テンコチ・アブラメ・キス・ペラなどセウタセ網と同じ浅瀬の獲物を狙うが、船はセウタセのものよりさらに小さく、風を利用しないため、帆はない。アミの端に目印の樽ウキをつけて浮かしておき、船を進めてフクロ網を沈めてから円を描いて逆の端を

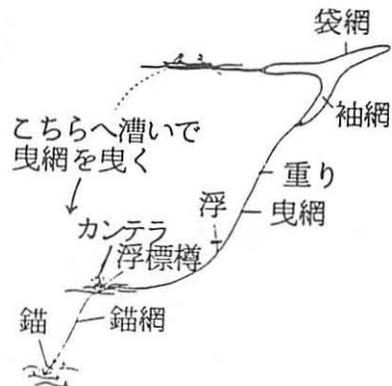


図5 テングリ網漁
 『瀬戸内海のくらしと歴史』より

持つて目印のウキのところまで帰ってくる。二人で片方ずつ網をたぐり寄せ(これが名前の由来)船の上で曳き揚げる。夜間に漁した。

〈建網〉九月〜十月
 百五十尋(約二七〇m)の長さの長方形のアミを約百枚つないで、海岸線と垂直の方向に張る。魚は潮の方向に逆らって泳ぐ習性があるので、潮の方向に流れるアミに捕まる。獲物はコノシロ、モゼ。とさきどきフカの子が入ることがあった。一回目は夜五時にアミを張り、八時に揚げ、二回目は朝三時に張り、六時に揚げた。深江では二〇軒ぐらいやっていった。

〈ハエナワ漁〉六月〜十月(図6参照)
 六月〜八月はウナギ、九月〜十一月はアナゴ、十二月〜五月はマハゼ・カレイを釣った。打瀬網漁をする漁師はあまりハエナワ漁はしなかった。ハエナワはふるいのような形をした入れ物に釣針をつけた釣糸約二百本を入れたのを一ハチと呼び、一回の漁

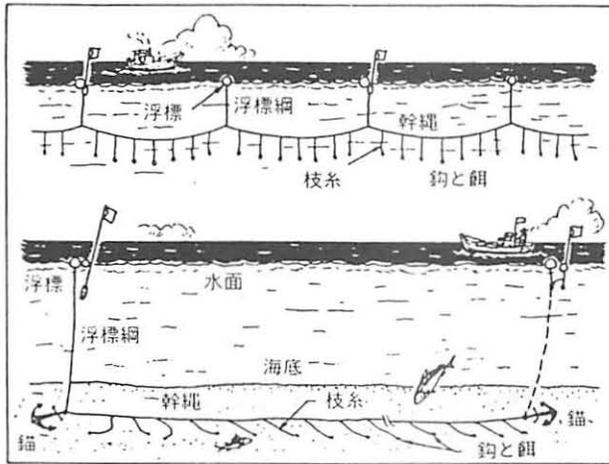


図6 ハエナワ漁「民俗探訪事典」より

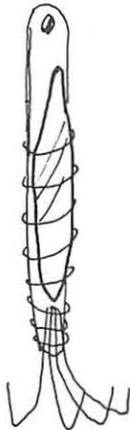


図7 イカ針

に三〜四十八チを持つていった。目印ウキを両端につけて水面と平行に張った太糸から一尋(約一・八m)ごとに細糸をつるし、その先に釣針をつけた。

針の部分がちょうど海底につくぐらいにした。糸を海におろして、半時間後に揚げた。操業時間は、カレイは八時〜十二時、アナゴは十七時〜二十四時、ウナギは、十七時〜二十二時、エサはそれぞれゴカイ、イワシ・サンマ・イカ、ミミズを使った。

〈イカ釣〉 九月〜十月

商売にはしていない。遊びや自家用の漁。獲ったのはマイカ。おもりと針をつけた釣具にエサのイワシの切り身などを固定し(図7参照)、夜間ランプを

つけてイカをおびき寄せて釣った。

〈タコ釣〉

商売にはしていない。イカ釣とよく似た釣具にエサの小ガニをくくりつけ、タコを釣った。

〈タコ壺漁〉

縄にタコ壺をたくさんつけて沈め、引き揚げて中に入ったタコを獲る。深江では一軒だけやっていた。

〈一本釣〉 八月末〜十一月

サワラ・サゴシを狙う。いる時はタチウオも獲った。エサはサワラはイワシ、タチウオはドジョウ。イワシはおろして中骨を抜く。こうするとエサがまわらず、生きているように揺れる。ひとつの船から両舷に二つずつおを出して釣った。

戦前、エンジン船ができるまでは、夏の「ニガシオ」で近海で漁ができなくなった打瀬網漁の漁師たちが、一本釣に切り替え、沖へ逃げた魚を追って、須磨・淡路までも出漁した。このため一本釣のことを「ハシリ」とも呼ぶ。

(註)

① 「兵庫県漁業慣行録 巻の四」

② 八月には深江近辺の海底は腐ってドロが湧いた。これをニガシオと呼び、この時期、魚は酸欠状態になるのを避けて、沖へ逃げた。

◇ スタッフから一言 ◇

☆ひさしぶりにスタッフから一言をお届けします。前館長の田辺氏が帰国されました。園田学園女子短期大学の助教になられました。これからの活躍をお祈りします。

☆今号は、史料館開館十周年記念号ということで、館員の普段の地道な活動の成果の発表を、多く掲載できることができました。

☆大国館長を中心に、館員一同暑い夏を乗り切り、秋から始まる特別展「魚をとる」の準備に燃えています。後に書かれたスタッフからの一言にも、その決意が感じとれると思います。ご期待ください。

(H・M)

☆望月主任研究員、毎度編集ご苦労様。私自身ライフワークの採石場の調査研究に加えて、石工名の採集に走り回っている昨今です。若林泰氏を偲ぶ会も近々に何かをお届けできるはずです。(Y・F)

☆漁師さんのお話は、聞くたびに新しい発見があります。ワクワクしながらの聞き取りでした。

(K・S)

☆特別展「魚をとる」でたくさんさんの絵を描いています。批評をお待ちしています。(R・I)

☆夏休みに北海道へと計画したものの、飛行機がとれずに断念、結局どこへも行けずじまいの夏でした。秋からの特別展の準備に、館員一同フル回転。特別展「魚をとる」よろしく願います。(T・M)

☆この夏、北陸へ旅行に行きました。各博物館を見学させていただきました。ありがとうございました。(Y・M)

神戸女子薬科大学構内古墳(三)

史料館研究員 藤川 祐 作

神戸市は、一昨年市制が施行されてから丸百年にあたり、恒例の神戸まつりに協賛し、神戸深江生活文化史料館では特別展として、「東灘の歴史」展を平成元年度に行なった。

史料館研究員の道谷卓氏が、その一部を13号の『生活文化史』に報告している。その中で、岡本村全図から扁保曾塚について位置・方位についてかなり良好な資料を提供してくれた。

さて、10号・11号で報告した、神戸女子薬科大学構内古墳の出土遺物一括を、同大学の各別のご配慮から借用展示することができた。

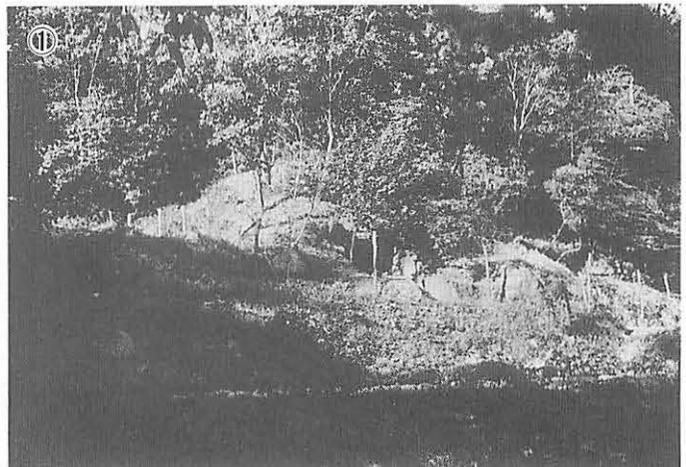
私が10号のなかで勝手な心配をした、昭和四八年に(一九七三)に測量調査をてがけた、神戸大学考古学研究会の話から、かなりの遺物が紛失しているのではないかと心配は、今回の借用でまったく杞憂であることが確認された。遺物は、一括して図書館内のコーナーで、陳列ケースに入って展示公開されている。ただ、女子大学ということから、誰でもが古墳を含めて、気軽に見学できない点は残念である。なお、借用に際して、大学開設当時の昭和九年(一九三四)の同古墳の全景写真が残されており、遺物とともに借用し、複写を起こした(第1図)。また、遺物については柏原正民氏の手によって、あらためて実測図を作成した。遺物の内、写真のなかった高坏(第2図)・青銅鏡(第3図)を報告し、借用

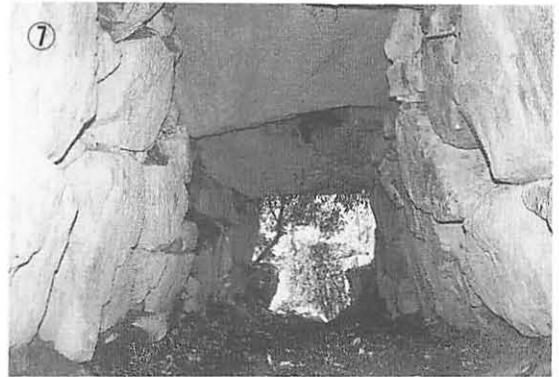
におもむいた際、同古墳の近景(第4図)・石室内の写真撮影を行なった(第5図・第8図)をあわせて報告する。

なお、10号・11号に若干の誤りがあったので、次の通り訂正をしておく。10号では、坏蓋の観察で、2・4以外は焼成良を2・3と訂正。第2図の2・3を入れ替え。12号では、須恵器の観察の14は丸味で薄手の口縁部に訂正。

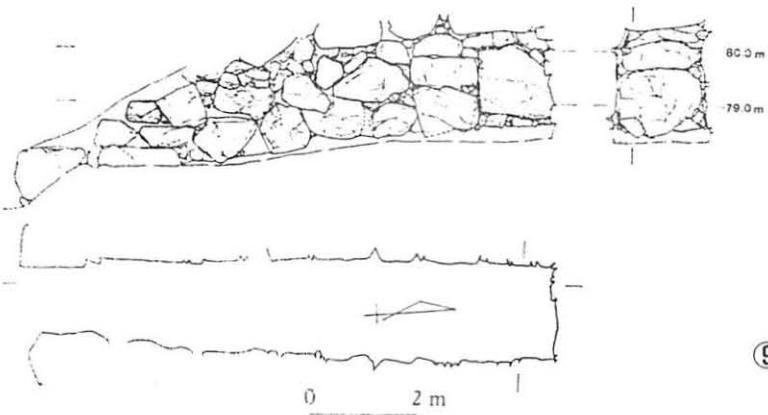
最後になったが、ひとつの古墳の紹介に三回にわたり報告してきた結果、読者の皆様にはたいへん不便をかけた。深くお詫びしたい。また、今回も古川久雄氏の手をわずらわせた。記して感謝にかえる。一日も早い、神戸大学考古学研究会の手による、測量調査報告書の発刊を切望するものである。

- ① 昭和9年当時の遠景
- ② 高坏脚部
- ③ 青銅鏡





- ④ JRからの遠景
- ⑤ 古墳の近景
- ⑥ 開口部から奥壁をのぞむ
- ⑦ 玄室から開口部をのぞむ
- ⑧ 玄室から奥壁をのぞむ



⑨ 石室実測図
 (『新修神戸市史』より)

神戸市東灘区深江北町四丁目八、阪神電車深江駅前の踏切から山側に三百メートルほど歩いた宝くじ売場の前に一基のマンホールがある。

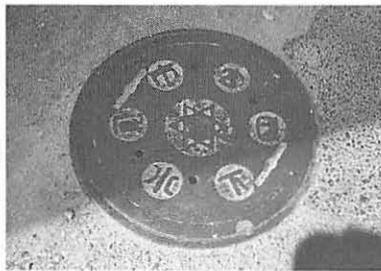
通りを行き交う人々に来る日も来る日も頭を踏まれて、すっかり表面がすり減ったその蓋は、周りの激しい人通りとは対照的にひっそりと佇んでいる。商店街に面した深江のメインストリートであるこの通りは、通勤や通学、買物客といった大勢の人たちに利用されている。しかし通る人は多いけれど、マンホールの存在などにわざわざ気を止めるような人は滅多にいないのではないだろうか。

この蓋は直径四十九・五センチ、形は円で鉄製と考えられる。表面は前にも述べたとおり、激しくすり減っているけれど、よく見ると全体に斜め格子の模様が見られる。また中心には西宮市のマークを配し、その上半分を取り囲むように「西宮市下水道」の六文字が読み取れた。摩滅具合から考えても、かなり長い間使われていたことはわかるけれど、とくに表面の六文字が右から左へ横書きされている点が注目される。横書きの文章が今のように左から書き始めることになったのは昭和二十六年以降のことである。よってこの蓋が造られたのはそれよりも前ということであろう。

さてこの辺りに水道が造られたのはいつ頃のことだろうか。東灘区は神戸の市街地のなかで合併されたのが遅く(昭和二十五年)、それ以前は御影・住吉・魚崎・本庄・本山の五ヶ町村にわかれていた。昭和十一年七月、五ヶ町村や神戸市を含めた当時の阪神間三市十三町村は、合同して淀川から取水する上水道の建設を計画、阪神上水道組合を設立した。翌年

より工事を始め、十七年には御影町に給水を開始している。深江が含まれる本庄村は、魚崎町とともに本山町北畑の配水地から水の分配を受ける計画であったが、十三年の阪神大水害による被害や財政上の困難から工事は進まず、十七年ようやく着工した。

史料館からの手紙 ～西宮の文字の見える マンホール蓋～



柏原正民

っていることを確認しており、一部の地域では神戸市との合併より前に下水道を造っていたことが明らかとなっている。筆者はこのような合併以前のマンホールに興味を抱き、御影町以外の地域ではどうかと思つて、東灘区内をあちこち探し歩いているときに遭遇したのが、今回紹介したマンホールであった。さて最後に、なぜ深江駅前に西宮市の、しかも戦前もしくは終戦直後のマンホールがあるのだろうか。結論から言うと、その原因は全然わからない。西宮市で下水道が造られるのは昭和十年前後と考えられるけれど、同様のマンホールは今のところ西宮市域でも見つかつておらず、貴重な存在であることは確かかなようだ。

目を転ずることによつて、われわれの身近にあるモノが「歴史の証人」の役割を果たすことも少なくない。モノに歴史を語らせるとき、先入観は禁物だ。こちらの勝手な思い込みにも邪魔されて、大事な部分を見逃してしまう恐れがある。素直な気持ちで向かい合えば、どんなモノであっても「資料」へと変身する。今回紹介したマンホールは不明な部分が多いけれど、当の西宮市域においても珍しい資料が深江にあることは、たいへん興味深い。「たかがマンホール」などと思わずに積極的に働きかければ、もっと大きな収穫をもたらせてくれるであろう。

「ボロは着ても心は錦」「見かけじゃなくて中身で勝負」このことばは人間だけでなく、歴史の資料とも正しくおつきあいするエチケットであることを改めて思い知らされている。

以上が五ヶ町村における上水道建設の概要である。これに対して下水道に関する記録は極めて限られており、戦前に下水道が造られたかどうかですら、既刊の資料からはわからない。ただ旧御影町にあたる地域で、御影町のマークをつけたマンホールが残

覚浄寺の延享三年銘の瓦について

史料館主任 望月 浩
 研究員

一、はじめに

昨年の五月二十七日付けの神戸新聞に、「江戸時代中期の銘入り瓦」という見出しで、神戸市東灘区魚崎南町七にある覚浄寺の瓦のことが載っていた。新聞記事によると、本堂が老朽化して、雨漏りがするようになったために、屋根の全面ふき替えを行なうことになった。そのときに、江戸時代中期の銘の入った丸瓦が見つかったということである。

瓦には、年号と人名・地名が刻まれていた、ということなので、その追跡調査を行ない、その報告をしてみたいと思う。以下、わかったことを書き綴ってみた。

二、瓦の観察

新聞記事で紹介された瓦は、丸瓦と呼ばれる瓦である。これは、丸瓦と平瓦とを交互に並べて葺く本瓦葺きを使用される瓦の一つで、江戸時代以降の普



瓦 近撮 (神戸新聞社提供)

通の民家では、横断面がS字形の平瓦で葺いた棧瓦葺きとよばれるものが使用されている。

丸瓦の凸面に、次のような文字が刻まれていた。

「延享三年 丙寅年

泉新村瓦子徳兵衛

正月吉日

藤助作者」

延享三年は、西暦一七四六年にあたり、江戸時代中期の徳川家重が將軍になった次の年である。

三、覚浄寺について

覚浄寺は浄土真宗西本願寺末で、かつて福寿寺と呼ばれていたというが、開基や由緒は不明である。明治六年に学制発布と同時に、同寺を借用して魚崎小学校が開設されている。

寺の縁起では、本堂は延享三年(一七四六)三月



瓦 拓本 (採拓 望月)

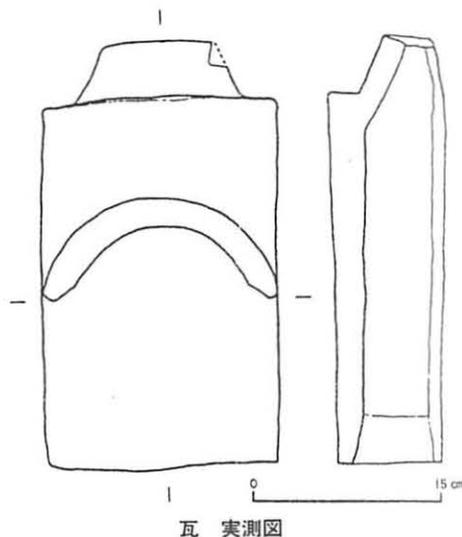
に建立されたといわれてきた。

四、泉新村と瓦産業について

泉新村がどこの場所に当たるか、ということであるが、一つの村の名前にしては、不自然なので、泉(和泉国)の新しい村であろうと考えた。

瓦に刻まれている「泉新村」は、現在の大府阪南町(平成三年秋には阪南市になる)新町と呼ばれる地区である。新村は、名前から見て他の村から分かれたと思われる、南西にあった波有手村から天正年間(一五七三〜一五九一)に分離した集落と推定されている。当初は、「北湊」と呼ばれていたようである。元禄年間(一六八八〜一七〇三)には、漁業で栄えていた記録もある。

「毛吹草」という、松江重頼が寛永十五年(一六三七)に書いた書物を見ると、和泉の項に「鳥取通茶磨 貝塚麦粉 大島草履 鍛冶炭 天川鳥子 岡田干鯰 石津神馬藻 瓦」と名物があげられている。これらが近世初期に和泉地方で知られていた名



瓦 実測図



神戸市東灘区と阪南町の位置関係



阪南町新町付近図 (1/25000)

産である。このころにすでに、瓦という文字が見られる。近世から明治期にかけては、現在の岬町あたりが中心であったが、新村・尾崎村・波有手村など、現在の阪南町に属する地域も、江戸時代初期から瓦の産地として知られていた。

『花園史学』創刊号の福島雅藏氏「関東譜代土浦藩の泉州飛地統治」という論文が掲載されている。氏は、『阪南町史』の近世部門の担当者でもある。論文のなかに、「泉州瓦の中心地は、近世後半期では、谷川村・深日村・箱作村等のほか、尾崎村・新村・波有手村に於ても行なわれていたらしい。」とある。しかし、遠く離れた覚浄寺の瓦に延享三年の銘があ

るので、少なくとも江戸時代中期には新村ではすでに瓦生産が神戸まで販売するほど、盛んに行なわれていたことがいえよう。

しかし、新町には現在瓦を作っているところはない。

五、「徳兵衛」と「藤助」について

成子幹一氏(氏は村の中でも歴史に詳しく、「阪南町史」の協力者になっている。)の話より

・江戸時代末期まで、瓦を舟で大阪・神戸方面に送っていた。

・特に港から、荷物を出荷するのではない。適当な海岸に船を近付けてきて、停泊する。そして、伝

馬船のような小さい船に荷物を乗せて、停泊している船に荷物を積み込む。
 ・成子家は、新町の他の人たちから、「川六」と呼ばれている。川は、瓦のこと。昔、六兵衛という人が瓦の商売をしていた。作って売るのはなくて、和歌山の方から製品を大阪方面に出荷していたらしい。

・新町地区では、他の家の名字を呼ぶのではなくて、通称を呼びあう。たとえば、成子家は、「瓦屋の六兵衛がいたから「川(瓦)六」さん。成子家から分家した家を「シンタク」さん。ひどいのは、大阪方面から来た人は、そのままずっと「大阪」さんと呼んでいた。

・「徳兵衛」「藤助」という、瓦に刻まれていた人名で呼ばれる家が現在ある。
 辻徳治郎氏の話より

・新町でも一番お年寄りの辻徳治郎さんにお話を聞くが、むかし瓦を扱っていたという話は聞いたことがないと話された。ちなみに「徳兵衛」という通称で呼ばれる家は、ここだけである。むかし徳兵衛という名前の先祖がいたことは伝え聞いている。氏の名前も、徳兵衛より一字取っている。

・「藤助」と呼ばれている家は、現在中谷という姓の家である。「辻」・「中谷」両方とも地域内では何軒かあるのだが、「徳兵衛」「藤助」と呼ばれる家は、それぞれ一軒だけである。「藤助」と呼ばれる中谷家では話が聞けなかった。成子氏によると、中谷家も何も知らないだろうということであった。ちなみに、檀家寺である称念寺の墓地へ行くと、第二次世界対戦の時に亡くなった人の墓に、中谷藤助という名前があった。

六、和泉瓦

泉南地方の銀色に輝くいぶし瓦は、「和泉瓦」と呼ばれ、かつては、隆盛を誇っていた。

岬町・阪南町を中心にした小規模な製瓦工場で、一枚一枚丁寧に磨き上げられたものが主流であった。しかし、むかしながらの製法をしている瓦工場は、現在では岬町多奈川の軒にすぎないという。

建売住宅と共に普及した釉葉瓦（俗称・色瓦）やプレハブ住宅に葺かれる軽量瓦などに押されて、民家向けのいぶし瓦の需要は減少した。加えて、もともと普及タイプの瓦産地であった淡路島の品質が向上して比較的廉価に供給されるようになってきた。

いぶし瓦は、焼成の最終段階で窯の通風口を閉じて不完全燃焼させ、発生した煤煙によって着色する

と同時に粘土粒子の微細な間隙を埋めて漏水を防ぐものである。こうしていったん火を止めてから、もう一度不完全燃焼させる工程のために、釉葉瓦のように連続焼成させることがむずかしく、焼成炉は八百枚から千枚積み込める小型の「ダルマ窯」が用いられてきた。

瓦は、普通の民家用のものでも屋根の大部分を占める平瓦をはじめ、軒先瓦・袖瓦など基本形が約十種類に分かれ、それがさらに大小や変形など、かなり多種類に分けて作られている。なお、これらの各種の瓦は、淡路瓦のように工程別になかば分業化された形の産地もあるが、和泉瓦の場合は工程・種類を問わず原則として各工場が鬼瓦を除いて全品生産している。

しかし、大阪市内から泉州にかけての寺院の多くは「和泉瓦」で屋根が葺かれている。寺院の場合、民家と異なり反り屋根になっているため、平瓦だけでも形・大きさ・反りを微妙に変化させた十数種類が必要な他、装飾的な瓦も多い。そのため、淡路のような量産型の産地ではかえって作りにくく、加えて、寺院の場合は補充・部分交換用の需要が多いため、従来の窯元へ注文するケースが多いこともあって、和泉瓦の役割も大きい。

七、おわりに

以上、覚浄寺に見つかった延享三年銘のある丸瓦についての調査報告を終りたいと思う。覚浄寺側に当時の記録がなく、具体的資料に乏しい報告となった。しかし、延享三年当時、和泉国新村から船で大阪湾を北上し、運ばれてきた瓦を本堂の屋根に利用したことは、明白であろう。そしてその瓦は、当時

の新村にいた徳兵衛という何人かの瓦師に藤助という職人がおり、彼が記念か自信作であったためか、作者名と紀年銘を彫つたものと思われる。また、覚浄寺と新町の泉養寺が同じ浄土真宗本願寺末なので、当時の僧侶同志の交流があったのではないかと思ったりもしてみた。

なお、本報告をするにあたっては、阪南町立図書館ならびに阪南町新町の泉養寺・成子幹一氏・辻徳治郎氏には大変お世話になった。記して感謝したい。実測図は藤川祐作研究員ならびに森岡秀人氏の手を煩わせた。同じく感謝を記したい。



覚浄寺（本堂屋根ふき替え前）

史料館日誌抄

史料館研究員 道谷 卓

H 2 年

- 1月20日 本山南小学校 3年生(見学者 91名)
 1月24日 西灘小学校 3年生(見学者 106名)
 1月27日 東灘小学校 3年生(見学者 161名)
 2月2日 春日野小学校 3年生(見学者 61名)
 2月3日 渦ヶ森小学校 3年生(見学者 209名)
 2月9日 魚崎小学校 3年生(見学者 201名)
 2月10日 本山第三小学校 3年生(見学者 125名)
 2月25日 友の会 第70回例会(参加者21名)
 史料館開設9周年記念・友の会総会
 3月3日 神大附属住吉小学校 3年生
 (見学者 120名)
 3月9日 福池小学校 3年生(見学者 108名)
 4月28日 1990春の特別展「ザ・ひがしなだ」展
 (～9月2日まで)
 5月20日 友の会 第71回例会(参加者50名)
 講演「国際化の動きと外から見た日本」
 田辺真人氏 於、深江会館
 5月27日 友の会 第72回例会(参加者52名)
 バスツアー「春日局のふる里を訪ねる」
 講師 道谷 卓氏 望月 浩氏
 7月1日 友の会 第73回例会・東灘区役所後援
 (参加者51名)
 講演「ザ・ひがしなだ―東灘の歴史の足跡をたどる―」
 道谷 卓氏 於、深江会館
 7月2日 東灘区役所新規採用職員研修(見学者 26名)
 10月10日 友の会 第74回例会・東灘区体育協会共催
 (参加者100名)
 第8回魚屋道を歩く会
 案内 望月 浩氏
 11月3日 友の会 第75回例会・東灘区体育協会共催
 (参加者160名)
 見学会「史跡ウォッチング・東灘」
 講師 道谷 卓氏 望月 浩氏

- 11月16日 小部東小学校 3年生(見学者107名)
 11月25日 友の会 第76回例会(参加者35名)
 講演「ニュージーランド日本交流の最新報」
 田辺真人氏 於、深江会館

H 3 年

- 1月12日 本山第三小学校 3年生(見学者 123名)
 1月19日 渦が森小学校 3年生(見学者 106名)
 1月25日 魚崎小学校 3年生(見学者 216名)
 1月30日 東灘小学校 3年生(見学者 180名)
 2月1日 西灘小学校 3年生(見学者 68名)
 2月2日 渦が森小学校 3年生(見学者 101名)
 2月8日 福池小学校 3年生(見学者 101名)
 本庄小学校 3年生(見学者 229名)
 2月9日 本山南小学校 3年生(見学者 101名)
 2月23日 摩耶小学校 3年生(見学者 83名)
 3月10日 友の会 第77回例会(参加者 54名)
 バスツアー 創設10周年記念
 「当尾の里を訪ねる」
 講師 道谷 卓氏
 5月12日 友の会 第78回例会・神戸まつり東灘区協賛
 会共催(参加者 100名)
 史料館開設10周年記念式典・友の会総会
 記念講演「私と郷土史研究」
 講師 落合重信氏
 6月23日 友の会 第79回例会・神戸市中央区役所共催
 (参加者 120名)
 見学会「『中央区歴史物語』を歩く」
 講師 道谷 卓氏 望月 浩氏
 7月5日 東灘区役所新規採用職員研修
 (見学者 21名)

納多 春雄	清水 久雄	大川 弘	門前 喜康	友の会幹事	事務局長	調査員	山本 文雄	藤川 祐作	伊東 玲子	主任研究員	事務局主事	館長代行	松尾 福夫	志井 保治	小嶋 悦廊	磯辺 信三	理事	深江ショッピングセンター	神戸史学会	日本玩具博物館	芦屋市教育委員会	神戸市教育委員会	神戸市観光課	神戸市観光課	神戸市商船大学	東灘区役所	本庄五校園	御影高校地歴部	深江青少年協議会	サンテレビ	大丸百貨店	明石市立天文学館	【協力団体】
	多田 康治	佐野 末夫	吉川 永子	小嶋 悦廊	大塚 康弘	山本 文雄	藤川 祐作	伊東 玲子	下久保恵子	望月 浩	阿部 英子	大国 正美	松尾 健二	志井 保治	小嶋 悦廊	磯辺 信三	理事	ショッピングセンター	神戸史学会	日本玩具博物館	芦屋市教育委員会	神戸市教育委員会	神戸市観光課	神戸市観光課	神戸市商船大学	東灘区役所	本庄五校園	御影高校地歴部	深江青少年協議会	サンテレビ	大丸百貨店	明石市立天文学館	【史料館員・役員】
	田辺ゆかり	佐原 浩平	磯辺 信三	中嶋 薫	西村 敦	文雄	道谷 卓	田部美知雄	望月 友二	望月 浩	阿部 英子	大国 正美	健二	真田 真人	志井 正夫	磯辺 正雄	理事	センター	神戸史学会	日本玩具博物館	芦屋市教育委員会	神戸市教育委員会	神戸市観光課	神戸市観光課	神戸市商船大学	東灘区役所	本庄五校園	御影高校地歴部	深江青少年協議会	サンテレビ	大丸百貨店	明石市立天文学館	【史料館員・役員】